



編集委員が行く
塩の道
周辺探検記
道中に残された人・文化・物の交流の歴史を追跡

塩市から塩を奥地に運ぶ道を「塩の道」といった。

当時、この道は重要な産業道であり、塩だけでなく生活必需品や歴史、文化なども伝えてきました。今回は広報編集委員が歩いた、文代峠から赤岡までのそれぞれの「塩の道」を紹介します。



--広報編集委員--
島崎則彦・田中たい子・久保きみ
十萬眞明・野村土佐夫

「赤岡の塩の由来」
今から400年前、関ヶ原の戦い後、土佐へ入国した山内一豊は、赤岡の濱五郎兵衛に対して元親時代と同様の大庄屋塩田21・酒浦18の資格を与えた。
五郎兵衛は撫養地方の精塩法により作塩（にがり分の多い塩）から真塩（白い塩）の精製に成功した。寛保2年（1742）ころには、前浜から羽根までの間に揚げ浜法塩田を開拓した。與楽寺山門（現在の赤

岡庁舎周辺）で上質の塩が物々交換され、市が立ったという。この塩は遠く藩境まで運ばれた。
塩の道探訪へ
今後、本・問道の見定め、隠れた郷土史の発掘と、将来は楽しい郷土史ハイキング、ドライブコースを企画し、僻地の活性化、忘れられつつある郷土遺産継承の基礎的調査とした。
（野村土佐夫）



通りは、約100軒の個性的な露店が並び、路上ライブやどこからか聞こえてくる民族太鼓の音色。

商店街では仮装した店主や地域の郵便局、銀行、農協の職員たちの店、大人気の「路上のこたつ」や「橋の上ステージ」の赤岡保育園児のよさこい踊りや冬の太極拳大会など、思い思いの場所で楽しむ光景が見られました。



祭りで見える「一両小判」は1枚百円。両替商は、銀行の職員さん！



「お笑い芸人も参加した大杯飲み干し大会」



名物「路上のこたつ」を囲む人たち。祭りで出会って意気投合！

冬の大祭

第十二回
あかおか

その昔「塩市」があり、人も物も集まる賑やかだったまち、あかおか。今年12回目を迎えたこの祭りは、赤岡を愛する若者とまちの人たちが始めたフリーマーケットが発端でした。

12月2日（土）3日（日）赤岡町横町商店街で、冬の夏祭り（同実行グループ主催）が開催されました。
人が人を呼び、商店街に活気を、と年々盛り上がりつつ行き、地域と集まる人たちの個性が独特のスタイルで解け合うユニークな形で続いてきたこの祭り。毎年、楽しみにしている人も多く、遠くは北海道など県外から訪れるファンもたくさんいます。
この2日間で約7千人が訪れ、活気と笑い声に会場の冷気が緩んでいました。

